

歌と写真で綴る薩摩の脇道 — 歌三昧の史跡巡礼, その4-2 —

キラメキテラス ヘルスケアホスピタル 鹿児島大学 名誉教授 加治木温泉病院 県立大島病院	栗 博志・高田 昌実・萩原 隆二 納 光弘 夏越 祥次 栗 隆志
---	---

[3] 市立美術館の3体のブロンズ像, 鑑賞

市立美術館の正面の大通りから、石段を登ると、遠目にも作者名が思い浮かぶ、2つのブロンズ像が目に入る (図155)。

更に前方に進むと、わずかの生垣のすきまから、もう一つの像を見る事ができる。足速に歩くと気付かない (図156)。

ここに案内板は無いが、絵画、彫刻などの美術好きには、素晴らしい作品、展示である。案内板の無いのは、美観の問題からだろう。

残念ながら、これらの像に関心を寄せ、鑑賞する人は稀なようであるし、ただ眺めるだけでは、それを理解するのは困難である。若干の説明を、つけ加える。鑑賞の一助となれば幸いである。

まっ正面にみられる、飢餓でやせ衰え、然し血管の浮き出た手足と、筋肉質の四肢、ごつごつし太く、力強い指趾、恐怖と苦悶の交

錯する表情で、ポロ服をまとい、重い足どりで、とぼとぼ歩く男 (図157) の像。首に縄を巻き (図158)、それは、右袖の中を通り、右腰でたばねられている。

あたかも、十字架を背負って、ゴルゴタの丘を登るキリストの十字架のように。



図156 ザッキンと対称の位置にあるブルデル作のブロンズ像
共に持つ竖琴が芸術を暗示。



図155 市立美術館前庭の2体のブロンズ像
遠目にもロダンの「カレーの市民」(単体)とザッキンの作品と分る。



図157 ロダンのブロンズ像
ロダンの典型的作風、「カレーの市民」からの単体、「ウスターシュ・ド・サン・ピエール」。

この像は、オーギュスト・ロダン（1840-1917年）作の「ウスターシュ・ド・サン・ピエール」（1889年作）である。

1337年～1453年の英仏間の百年戦争の中、英王エドワード3世は、1347年、仏の港カレーを包囲。これに対し、仏王フィリップ6世は、この包囲からカレーを解放する事はできなかった。

エドワード3世は、市の重要メンバー6人が出頭すれば、市民の生命を保証するとした。出頭は、死刑を意味する。縄は、そのためのものである。

まず最初に、この像のピエールが、その後、5人が志願し、市の門の鍵を持ち、門を出ていった。

戦争の敗北、英雄的自己犠牲、死を前にした人達の苦悩を、ロダンは、6人の群像「カレーの市民」として、余す所なく表現している（なお6人は、エドワード妃、フィリッパ・オブ・エノーの嘆願で助命された）。

この像は、1884～88年に原型が造られ、その鋳型から、12エディションが鋳造された。本像は、群像とは別の単体である。この人物の背景を理解して鑑賞してほしい。

なお、ジャンヌ・ダルクがオルレアンを解放したのは、1429年。1453年に、シャルル



図158

首に巻かれた縄は、ゴルゴタの丘の坂道を登る、キリストの十字架と同じ。縄は右腰にたばねられている。

7世が、ボルドーを奪還し、百年戦争は終結。ただカレーだけは、1558年まで、イングランド領であった。

右手には、オシップ・ザッキン（1890-1967年）の1959年の作品が建っている。キュビズムの影響を受けた、この作家の重要作品と言える（図159）。

竖琴を持っている事などから、モチーフの人物が、ギリシャ神話の「オルフェ（オルフェウス）」である事が分る（図159）。

所でキュビズム（キュビスム、立体派）は、ピカソとブラックにより、20世紀初頭に創始された（アヴィニヨンの娘達、ピカソ、1907年）具象絵画であり、複数の角度（視点）や面から見た対象を平面の画面に描くもので、色彩のフォーヴィズムに対する、形態の独特な表現方法で、遠近法、写実を排除している。この手法は彫刻など多方面に影響を与えた。

ただ、図159のこの奇妙な造形を、単にキュビズムというだけで片付ける事はできない。



図159 ザッキン作のブロンズ像

竖琴を抱きかかえたギリシャ神話の「オルフェ（オルフェウス）」を忠実に表現している。単なるキュビズムの造形ではない。残った右上半身は、背骨から離れ、ねじれている。足の方向と、むき出しの背骨、右上半身の位置関係に注意。像自体のバランスは、見事にとれている。彼の才能が、みてとれる。

ザッキンは、極めて精確に神話の世界を再現している (図160, 161)。

ここでは基礎知識として、この像に合ったオルフェを説明し、鑑賞の助けとしよう。

神話のオルフェウスは、アポロン神とカリオペの子で、父より豎琴を伝授され、吟遊詩人となった豎琴の名手である。

彼の豎琴の調べには、森の動物までもが集まって、聴き入ったという。

彼の妻、エウリュディケは、毒蛇に噛まれて死ぬ。オルフェウスは、冥府に行き、冥界の王ハデスに妻の返還を求めた。彼の琴の調

べと、王妃ペルセポネーの説得もあり、「冥界を抜け出すまで、決して後ろの妻を、振り向いてはならぬ」という条件下に許した。

暗い道を抜け、光がみえ、あと少しの所で、気になったオルフェウスが振り返った瞬間、エウリュディケの姿は、闇の中に消えた。

放浪の旅に出たオルフェウスは、酒神ディオニソス (バッカス) の祭り (儀式) で、狂乱した女達に、八つ裂きにされ、頭と豎琴は、川に投げ込まれた。

頭と豎琴は、レスボス島に流れ着いた。島民は、死を悼み、墓を造って吟遊詩人を葬った。

その後、島は、オルフェウスの加護で、多くの文人を輩出し、詩人の聖地となった。

ミューズにより、バラバラの身体は葬られ、豎琴は、ゼウスにより拾われ、星界に置かれ、琴座となった。

オルフェウスは、冥界で再びエウリュディケに出会う。

以上が、概略である。これだけを知っておけば、この像の奇妙な形態が理解できる。

この像を見ると、右上腕は、力なく垂れ下がっている。前腕は肘関節で離断されている。体幹は捻れて裂け、左胸腹部の骨格と筋は無い。背骨は剥き出しになり、飛び出している。左肩および左右の膝関節は、ずれている。多分、引き裂かれているのだろう。

腹腔から上方に放射状に広がった数本の鋼線は、飛び出した腸などの内臓を、模していると思われる (図160)。顔は上方を向き、苦悶の表情で口を大きく開け、叫び声をあげている。

最も重要な事は、右肩と左上腕で、しっかりと豎琴を、胸にかき抱き、琴を弾いている事である (図161)。

ザッキンは、この像で、この世の不条理、人間の残酷さ、そして音楽 (芸術) の永遠性を見事に表現 (私見) している。

図162の像は、ロダンやザッキンとは、垣



図160

オルフェの胴体 (胸腹部) の左半分は、なくなり、左肩関節は、ずれている (切断)。右上腕は垂れ下がり、右の胴体に接している。飛び出した内臓は、放射状に広がる鋼線で表現。

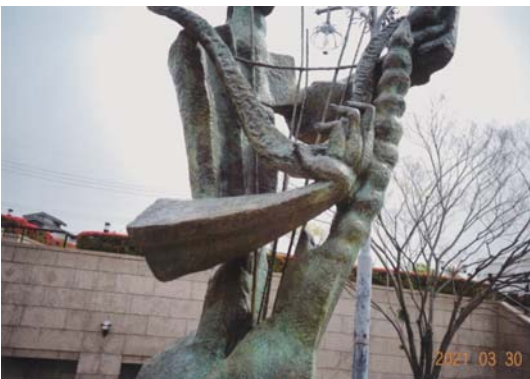


図161

背骨は、むき出しになり、残った右上肢から、右前腕は、ちぎれている。左上肢も肩関節からちぎれているが、それでも、豎琴を胸にかき抱き、決して離さず、琴を弾いている。芸術の永遠性を象徴している。



図162 ブールデルのブロンズ像
古代ギリシャの詩人「サッフォー」

周囲の景観に溶け込んでいる。オルフェと対称位置に配置され、オルフェの苦悩を中和して余り有る。両者の共通点は、豎琴、詩人そしてレスボス島である。芸術の永遠性を象徴している。

根を越えた別世界に在る。小鳥が飛び交い、さえずりが聞こえる森に隣接している。

この女性は豎琴に肘をつき、小鳥のさえずりをきき、まどろみ、瞑想にふけている。安らぎに満ちている。

この情景は、ザッキン作のオルフェの流れ着いたレスボス島（エーゲ海、トルコ沿岸のギリシャ領、ミティリニとも呼ばれる）のその後のもので、安らぎに満ちている。

この像は、アントワーン・ブールデル（1861-1929年）の1925年の「サッフォー」である。

サッフォー（B.C.630～612-B.C.570年頃、紀元前7世紀末-紀元前6世紀初）は、レスボス島で生まれた古代ギリシャの大詩人である。名声は当時から、世界に鳴り響き、プラトン（B.C.427-B.C.347）は「十番目のムーサ（ミューズ、文芸芸術の女神）」と讃えている。

彼女は、自分の選んだ若い娘のみ入学させる学校で、音楽、詩歌、舞踏等を教育した。

その著作は、歴史に名高い、エジプトのアレクサンドリア図書館に保管されていた。この図書館自体が、9人のムーサに捧げられていたものである。

図書館は、プトレマイオス朝のもとで発展



図163

右膝に置いた豎琴は、右手で握り離さない。琴は芸術を象徴。琴の台座の、上下肢を奇妙に交差させた人物像が、何を意味するかは不明。何らかのメッセージを込めていると思われるが。



図164

サッフォーは、単にまどろんでいるのではない。（病的？なほど）芸術に陶醉している事を示す、右足のパビンスキー反射。

したが、B.C.48年のシーザーによる火災、391年のキリスト教徒による破壊などで消失した。

サッフォーの詩も大部分が失われたが、一部は難を逃れ、現在、その愛の詩を読む事ができる。

ブールデルは一時期、ロダンの助手であった（第6章で述べた朝倉文夫は「東洋のロダン」と呼ばれていた）。

幼少時より絵を習い、絵画や彫刻が好きだった私が、初めて上京し、一番に行ったのが、国立西洋美術館であった。

ロダンの「考える人」「地獄の門」「カレー

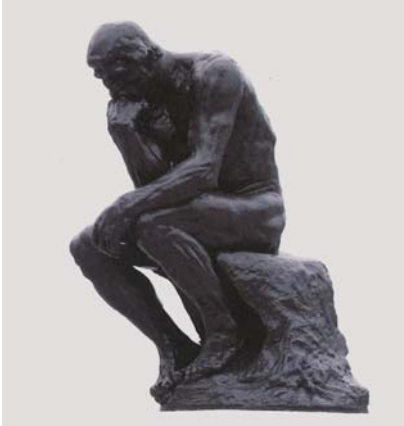


図165 国立西洋美術館のロダン作の「考える人」、
ロダン自身の命名は「詩人」

図162と比べると、ロダンとブールデルの関係がよく分る。2つの像の共通点は詩人、そして瞑想。

の市民」が、目の前にある事に感動し、それらが、屋外で雨ざらしになって展示されている事に驚いた。

また、地獄の門の中央上部に、小さい「考える人」を見つけた時には、不思議で理解できなかった。

今、そのロダンなどを、この前庭で間近に鑑賞できるのは、感動以外の何ものでもない。

ここでサッフォー像を初めて目にした瞬間、考える人を、それに重ね合わせていた。

ロダンは、右肘を左大腿についた不自然なポーズで、この筋肉質の男に動きを与えている。ブールデルは豎琴に右肘を置く事により、気負いなく、瞑想を表現している。

基本ポーズは、全く同じで、目指す所は同じなのに、表現方法は、動と静、全く逆で興味深い(図162, 165)。

ロダン自身が、「考える人」像に付けた名前が「詩人Le Poète」であった事は、よく知られている。

ブールデルは、ロダンの影響を受けているとは言え、その作品は師に劣らない。

ロダンは、ブールデルを高く評価し、最大の理解者であった。

たった3体のブロンズ像であるが、美術館には、誠に相応しく、このあたりを散策した時には、ゆっくり鑑賞し、芸術に心を寄せるのも、よいかもしい。

279 じめさあが 詩人と共に庭の中 琴の調べを とともに楽しむ

(次号に続く)

